巻　頭　言

応用光学技術を中心とした学会を

大　頭　　仁*

光学懇話会は，応用物理学会の一分科会として既に 30 年を越える活動を行なって来た．設立当初は主としてカメラやレンズの開発と研究を中心に，基礎研究者とメーカーの開発部門の方々との意見交換や協同研究を通じて日本の光学技術の進歩を図ることが目標であったように思われる．また，応用物理学会の活動においても最も重要な活発な分科会として，学会の発展に寄与した功績は大きなものであったことは多くの人の認めるところであろう．

欧米の学問や技術レベルに追いつけ，追い越せの時代は既に過去のものとなり，国際光学会議においても，故久保田広教授，木下是雄教授らを中心に，光学関係者の国際舞台でのご苦心，ご活躍もあり，現在はその会長として辻内順平教授が名実ともに世界の光学界のリーダーシップをとられている．多くの関連研究者，技術者そして企業の努力によって，日本の光学の水準がここまで高められたことに改めて感嘆すると同時に，ご同慶の至りでもある．

しかし，喜んでばかりはいられない．独立した人間に社会的責任と義務が存在するように，日本の光学界が真に国際的に対応するためには，それなりの独立した学会をもつことが必要であろう．そのような学会活動を通じて世界に奉仕したり，とくに日本をとりまく多くの開発途上国への学問的あるいは技術的協力の一助とすることも重要な課題ではなかろうか．

現在の光学懇話会には，応用物理学会の下部組織としての「光学分科会」という通称と，準学会的（あるいはサロン的？）に機能している「光学懇話会」の名称があり，その性格もおのずから2面性を有している（正確には「応用物理学会分科会光学懇話会」である）．このための利点はもちろん無視できないとしても，これからの将来に向けて国際化の時代には，むしろ活動の限界などもあり，不利，非能率的な点の多いのも事実である．

工業技術の分野では，レーザの出現，計算機，エレクトロニックスなどの急速な発展に伴い，「光」を取り扱う技術開発が革命的に拡がりつつあり，光学を基礎とする技術分野の将来は予想もできないほど豊富である．基礎的研究と，日々新たな他分野との交流を主眼として，新しい seeds の発掘や，光学の成果を feed back する意味で「分科会」の存在意義を明確にすることは，今後とも大事である．しかし，一方で「懇話会」の名称で育ってきた組織（実は現在まったく同一であるが）は，上記の諸理由から関連光学技術を中心にして，より活発な活動のできる場として，独立した学会として発展的に再発足したらどのようなものだろうか．「光学分科会」を縦糸にたとえるとすれば，横糸的に広い応用光学分野の再構成による「光学懇話会」の発展を期待したい．また，応用物理学会としては，各分科会が成長した折に，いわゆる A. I. P. 方式のように連合体として機能してゆくことも考えるべきではなかろうか．

* 早稲田大学理工学部応用物理学科　〒160 東京都新宿区大久保 3-4-1